

ぜひ読んでほしい本（大学で学ぶことども）

— 大学4年の間に乱読を！ —

Recommended Reading List

小栗 正彦 (Masahiko Oguri)

大学と高校とは違います。「大学とは『論理』を学ぶ場」です。そのためには、まず多くの本を読まねばなりません。齋藤孝は下記に紹介する本の中で「本は読んでも読まなくてもいいというものではない。読まなければいけないものだ。こう断言したい」といっている。私は同じような一文を『学び舎』創刊号に記したことがある。本稿はそれ以後加えた本と、それに対するメモである。この4年間に、さてあなたは何冊の本に出会うか。それがあなたの人生を決める。

①まずはこんな本から。

齋藤孝『読書力』（岩波新書）、『教育力』（岩波新書）。こんな記述がある。

「私は本を読むときに、その著者が自分ひとりに向かって直接語りかけてくれているように感じながら読むことにしている。高い才能を持った人間が、大変な努力をして勉強をし、ようやく到達した認識を、二人きりで自分に丁寧に話してくれるのだ。（本の値段が）いくら高くても高すぎるということはない。現実にはそれが数百円なのだから、話を聴かない手はない。昔の日本の師弟関係のように、先生の話に正座して一人で弟子として聞かせてもらう。これは、贅沢な時間だ」。そして最新刊の『なぜ日本人は学ばなくなったのか』（講談社現代新書）をぜひ手にとってもらいたい。

立花隆『脳を鍛える 東大講義「人間の存在」』（新潮文庫）、『東大生はバカになったか—知的亡国論+現代教養論』（文芸春秋社）。後者の本の中にこんな記述がある。

「『○○○について知っている人?』と聞きながら、授業をすすめた。ある程度知っている人がいれば、あまり細かな説明はつけ加えず、どんどん授業をすすめた。知っている人がゼロだと困るが、一、二割でもいれば、『わからない人は後で各自勉強しておいてください』といって、細かな説明は原則として省いた。とにかく、上位一、二割に焦点を合わせてひたすら先に進んだのである。」…東大での講義はかく、あるものらしい。

遙洋子『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』（ちくま文庫）…これはおよそ学問の世界と無縁?の社会の芸能界で活躍する遙洋子が、上野ゼミで「学問」と苦闘したドキュメント。

上野ゼミで教えられた「ここ（東大）は学問のプロを育てるところよ」「学問は教えられるものではなく、批判するもの」の意味がイキイキと描かれる。

山口二郎『若者のための政治マニュアル』（講談社現代新書）…民主主義とは何か、それを使いこなすための10のルールが若者に向けて平易に書かれている。まず「あとがき」からぜひ。

②これからいろいろな論文やレポートを書く君たちにとって、絶対読んで貰いたい本!

戸田山和久『論文の教室』（日本放送出版協会 NHKブックス）ならびに谷岡一郎の『「社会調査」のウソ リサーチ・リテラシーのすすめ』（文春新書）の2冊は君たちがこれから各種のレポートや卒論等を書くにあたって最低限、読んでおかねばならないものだ。

井上真琴『図書館に訊け!』（ちくま新書 486）

著書は同志社大学図書館でレファレンス係をしていた、その道のプロフェッショナル。論文の書き方（資料あさりも含めて）はこの本なしでは書けぬ!

前川恒雄・石井敦『新版 図書館の発見』（NHKブックス）も面白い。

日垣隆『使えるレファ本 150選』（ちくま新書）も参考になります。

千野信浩『図書館を使い倒す!』（新潮新書）と『まちの図書館でしらべる』（柏書房）もなかなか優れたもの。とくに後者はあなた方が卒業論文を書く時に参考になると思います。

石原千秋『大学生の論文執筆法』（ちくま新書 600）第一部は学生必読!

佐野眞一『誰が「本」を殺すのか 正・続』（プレジデント社）

③池上彰はNHKの日曜日の「こどもニュース」を担当していた人。高校の教壇に立つという人なら、どんな教科の担当でも、これくらいの常識がなければ。

『そうだったのか！現代史』、『そうだったのか！日本現代史①②』、『そうだったのか！アメリカ』(集英社)、『そうだったのか！中国』、『これで世の中わかる！ ニュースの基礎の基礎』(大和書房)、『そこが知りたい！ニュースのおもしろ真相』、『なるほど日本経済早わかり』、『日々の経済ニュースがすぐわかる本』、『わからなくなった世界情勢の読み方』(講談社)、『知っているつもりで説明できない…ニュースのことば』(幻冬舎)、『ニュースの「大疑問」』(集英社文庫)、『これから3年！ 世界はどうかかわる？』(青春出版社)、『これでわかった！ 政治のニュース』(実業之日本社)、『大衝突 巨大国家群・対決の行方』(集英社)、『日銀を知れば経済がわかる』(平凡社新書)、『14歳からの世界金融危機』(マガジンハウス)、『高校生からわかる「資本論」』(集英社)、『「見えざる手」が経済を動かす』(ちくまプリマー新書) などなど多数の著書は本当にわかりやすく授業に役立つ。

同じような本で、細野真宏『経済のニュースがおもしろいほどわかる本ー日本経済編』、同『世界経済編』(中経出版)、『経済のニュースがよくわかる本ー銀行・郵貯・生命保険編』(小学館)、『世界一わかりやすい株の本』(小学館)がある。いずれも教材になる。さらに同じ著者の本で『最新の経済と政治のニュースが世界一わかる本』(文藝春秋)も公民科の授業をするにあたって是非読んでおかねばならない本の一つ。年金制度が破綻する、やがて日本は借金で破滅するなどという「俗論」にどう対応したら良いかが非常にわかりやすく書かれている。

『「未納が増えると年金が破綻する」と誰が言った？』(扶桑社新書)も読めば「目から鱗」である。

『〇〇が面白いほどよくわかる本』と題して、全然わからない本が殆どだが、彼の本は違う。これは彼が予備校で教えている、カリスマ教師のひとりだからであろう。

④とくに公民科の先生になるにあたって、ぜひ読んでおいてほしい本。

小室直樹『痛快！ 憲法学』、『日本国憲法の問題点』(集英社インターナショナル)、『社会科学のためのモデル 論理の方法』(東洋経済新報社)、『経済学をめぐる巨匠たち』(ダイヤモンド社)

立花隆『ロッキード裁判批判を斬る』(1~3)(朝日文庫)…裁判にはなくてはならない「論理」「哲学」を現実の事件の分析から教えてくれる本。

『天皇と東大 大日本帝国の生と死 上下』(文芸春秋)は1500頁を越す大著。

若者はこのくらいの本に食いつかねば…。

犬養道子『人間の大地』(中公文庫)、石牟礼道子『苦海浄土』(講談社文庫)

鶴見良行『バナナと日本人』(岩波新書)、野村進『コリアン世界の旅』(講談社+α文庫)

大塚久雄『社会科学の方法ーウェーバーとマルクス』(岩波新書)

長部日出雄『二十世紀を見抜いた男…マックス・ヴェーバー物語』(新潮文庫)

ジョン・アーリックマン『チャイナ・カード 上・下』(角川書店)…著者は大統領特別補佐官なせ田中角栄がロッキード事件に「まき込まれたか」(それは米による仕組まれたワナだった!)がよくわかる。

広瀬隆『ジョン・ウェインはなぜ死んだか』、『アメリカの保守本流』(集英社新書)、『日本のゆくえ アジアのゆくえ』(日本実業出版社)、『東京に原発を』…この著者の書いたものは沢山ある。そのどれもが、読むと納得させられる。「この事件(出来事や政治上の動き)の背景にはこんな事実があったのか」ということが、これも「目から鱗」である。

彼の最新のものでは『持丸長者』(ダイヤモンド社 現在戦後復興篇までの3巻が出版されている)も読みはじめたらやめられない。最高に勉強になる。彼の『ゴルバチョフの処刑台』(光文社カッパブックス)も核軍縮についてのいろいろな政治問題を教えてくれる非常によい本です。

最近刊の『二酸化炭素温暖化説の崩壊』(集英社新書)も非常に勉強になる。

ビエトラ・リボリ『あなたのTシャツはどこから来たのか? 誰も書かなかったグローバリゼーシ

ヨンの真実』(東洋経済新報社)

21世紀研究会編『人名の世界地図』『地名の世界地図』『民族の世界地図』(文春新書)…これらの本は社会科を教える人には絶対必要なもの。

さて、高校の公民科や中学社会科の公民的分野、あるいは「総合的な学習の時間」などの教材を探そうとするならば、次の本をぜひ参考にしてほしい。

それは藤原和博さんが中心として作った本『世界で一番受けたい授業』の1、2(小学館)、あるいは『人生の教科書(よのなか)』と『人生の教科書(ルール)』(筑摩書房)、そして『親と子の「よのなか」科』(三室一也との共著 ちくま新書 これが一番手軽に入手し安い)、『ビミョーな未来をどう生きるか』(ちくまプリマー新書)です。

こんな授業だったら、誰でも社会科は好きになれると思うのですが…。

- ・1個のハンバーグから世界が見える。
- ・「ゴム」と地球とあなたの関係から政治と経済を学ぶ。
- ・家づくりをロールプレイング。
- ・「差異」と「差別」を考える。
- ・中学生はもう大人?まだ子ども(「少年法」を通して大人と子どもの境目を考える。)
- ・クローン技術と人間の倫理。
- ・仕事とキャリアを考えると人生が見えてくる。
- ・ニューハーフという人生。
- ・結婚と離婚と子どもをめぐるルール。
- ・なぜ人を殺してはいけないのか。などなど。

教育実習でこんな授業をまかせてもらえれば、やり甲斐があるのに…。

同じような本で、エリック・シュローサー・チャールズ・ウィルソンの「おいしいハンバーガーのこわい話」(草思社)も公民科の授業での恰好のネタ本になること、請け合い。

次の本も授業の余談として話すネタとしては知っていても面白い。それはテリー伊藤の書いた『お笑い 大蔵省極秘情報』『大蔵官僚の復讐』『お笑い 外務省機密情報』(いずれも飛鳥新社)だ。著者の名前や本の表紙を見ると、いかにもエゲツナイ本のように見えるけれど、立花隆が『天皇と東大』(文芸春秋)の中で「日本の官僚主義のエトスの部分を知るための必読書」と言っているように、ぜひ読んでおきたい本だ。

小倉千加子『結婚の条件』(朝日新聞社)『「赤毛のアン」の秘密』(岩波書店)『松田聖子論』…この著者は先の上野千鶴子と同じく、日本を代表するジェンダー学者。かつて本学で教鞭をとっていた。その授業の面白さといったらなかった。

酒井順子『少子』、『容姿の時代』(いずれも文庫本にあり)、『負け犬の遠吠え』(この本から未婚女性が30歳を過ぎると「負け犬」と呼ばれるようになった)

香山リカの『就職がこわい』(講談社)、『〈私〉の愛国心』(ちくま新書)、『いまどきの「常識」』(岩波新書)、桐野夏生『グロテスク』(文芸春秋社)などはどうか。

⑤地歴科の免許状取得希望者のために、ぜひ読んでおいてほしい本。

網野善彦『歴史を考えるヒント』(新潮選書)、『日本社会の歴史-3巻』(岩波新書)。

これはちょっと高価だが、岩波から出版されている『日本中世の非農業民と天皇』は面白い!

梅原猛『隠された十字架-法隆寺論』(新潮文庫)、上原和『斑鳩の白い道のうえに』(朝日新聞社)、服部之総『黒船前後・志士と経済』(岩波文庫)

大塚久雄の『社会科学の方法』と『社会科学における人間』(岩波新書)

古田武彦『邪馬台国はなかった』『邪馬一国の証明』(角川文庫)

石母田正(いしだしょう)の数々の著書は襟を正して、正座して読まねばならないような本である。歴史の専門課程は本学にはないが、歴史を教える者にとっては必読書だ。

まずは『日本の古代国家』や『日本古代国家論 第一、二部』(日本歴史叢書)、そして古典的名著『中世的世界の形成』が面白くなれば、もう歴史の先生としては超ベテランの域!

安田喜憲の数々の著書（川西宏幸との共著『文明と環境』『古代文明と環境』思文閣出版）
伊藤雅俊・網野善彦・斎藤善之編『市場経済の本流をつかむ 「商い」から見た日本史』（PHP
研究所）、広瀬和雄『日本考古学の通説を疑う』（洋泉社新書）
黒羽清隆の数々の著書、中でも『太平洋戦争の歴史』（講談社学術文庫）は必読。
中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』（岩波新書）は世界的名著といわれる。
上山春平・佐々木高明・中尾佐助共著『照葉樹林文化 正・続』（中公新書）
羽仁五郎『都市の論理 第一・二部』（講談社文庫）、『ミケルアンジェロ』（岩波新書）
佐々木高明『照葉樹林文化への道』（NHKブックス）
大石慎三郎『田沼意次の時代』（岩波現代文庫）…賄賂政治で悪名の高い政治家田沼や、彼の生き
た時代の見直し。この本を読まずして田沼の改革を語ることは出来ぬ。
森浩一『京都の歴史を足元からさぐる』（学生社）。全三巻（洛東の巻、洛北・上条・山科の巻、
北野・紫野・洛中の巻）だが、京都の歴史を語るには絶好の本。
杉山二郎『大仏建立』『大仏以後』『大仏再興』『西アジア南北記』（いずれも学生社）
若桑みどり『天正少年使節と世界帝国 クワトロ・ラガッツィ』（集英社）
永原慶二『苧麻ちま・絹・木綿の社会史』（吉川弘文館）
江戸時代の生活誌については石川英輔のものが確か。『大江戸リサイクル事情』（講談社文庫）
『大江戸生活事情』（講談社文庫）くらいは読んでおかないと江戸時代の授業はできません。同
時に田中優子『未来のための江戸学』（小学館新書）、『カムイ伝講義』（小学館）との併読を
お薦めする。もちろん白戸三平の『カムイ伝全集』全38巻（小学館）は必読。
つづいて鈴木浩三『江戸の経済システム』（日本経済新聞社）なども、授業で江戸時代の経済を
語る時なくてはならない本だろう。
渡辺京二『黒船前夜』（洋泉社）はとっつきにくい本だが、読み始めると物語を読んでいるようで
面白くなる。なお同じ著者の『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）もぜひ。
地方史には木曾川文化研究会『木曾川は語る 川と人の関係史』（風媒社）などは、授業で大いに
役立つ。
鯖田豊之『肉食にくまの思想』（中公新書）は牧畜的世界であるヨーロッパ社会が、その肉食生活の
思想的伝統によって日本人と根本的に異なる発想の世界であることを実に説得的に教えてくれる
「目から鱗」の本である。世界史の授業には欠かせない！
江上波夫・松田壽男・杉山二郎共著『世界史の新視点—学問・略奪・探検』（六興出版）
松田壽男『アジアの歴史』（NHK市民大学叢書）は非常に世界史の勉強にはなるが手に入れるこ
とがむつかしい。
さらに13世紀のユーラシア大陸を席卷したモンゴル帝国に関する知識などは杉山正明の著書から学
ばなければ大きく世界史の視野を見間違ってしまうだろう。最近刊の『ユーラシアの東西 中東、
アフガニスタン、中国、ロシアそして日本』（日本経済新聞出版社）は随分新しい東北アジア史研
究について教えてくれる。
ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄 上・下』（草思社）…世界史の授業には必読書！
阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界—』（平凡社）は最高に世界史の勉強になる。
今では絶版となっているが、レオ・ヒューバーマンの『資本主義経済の歩み 上・下』（岩波新
書）もぜひ図書館で借りて読んでもらいたい。「デイリー・ワーカー紙」の推薦文がいつている
ように「われわれはレオ・ヒューバーマンに感謝する。彼は経済の歴史を小説のようにひとを興
奮させる読物にした。これはすばらしい成功であり、大衆への真の奉仕だ」という一文が本当に
納得させる。一気に呵成に読み終えることだろう。
グレッグ・ベア『ダーウィンの使者 上・下』（ソニーマガジズ）
ユン・チアン『マオ 誰も書かなかった毛沢東 上・下』（講談社）。なお同じ著者が前に書いた
『ワイルド・スワン』も面白い。
松本清張の数々の推理小説『ある小倉日記伝』（短編の『石の骨』『断碑』が一緒に載せられてい
るのでぜひ！）『砂の器』『日本の黒い霧』『黒の福音』『火の路』などなど、すべて文庫本に
なっている。そして司馬遼太郎の膨大な本（これもすべて文庫本にある）。

ツヴァイク『人類の星の時間』『マリー・アントワネット』『マゼラン』（いずれもツヴァイク全集にある みすず書房）。なおさきの松本清張は「日本のツヴァイク」とも言われている。

鹿野政直『兵士であること 動員と従軍の精神史』（朝日新聞社）

中村政則『戦後史』（岩波新書）、毎日新聞旧石器遺跡取材班『発掘捏造』（毎日新聞社）

山本茂美の『あゝ野麦峠 正・続』『飛驒の哀歌 高山祭』（角川文庫）

李進熙『好太王碑の謎』（講談社文庫）、宮崎正勝『黄金の島ジパング伝説』（吉川弘文館）

海保嶺夫『エゾの歴史 北の人々と日本』（講談社学術文庫）

石光真人編著『ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書』（中公新書252）

篠田節子の『弥勒』、五味川純平の『人間の条件』、高橋和巳『邪宗門』、山田風太郎『明治波瀾歌』、飯嶋和一の『始祖鳥記』（小学館）、『雷電本紀』（河出書房新社）、『黄金旅風』（小学館）、『出星前夜』（小学館）、遠藤周作『沈黙』『侍』、船戸与一『蝦夷地別件（上・中・下）』（新潮文庫）、『満州国演義 1～5』（新潮社 刊行途中）、山崎豊子『大地の子』『二つの祖国』『白い巨塔』『不毛地帯』『沈まぬ太陽』（すべて文庫本になっている）『運命の人』、大仏次郎『パリ燃ゆ』、井上ひさし『四千万歩の男 上・下』舟橋聖一『花の生涯 上・下』（祥伝社）、角田房子『閔妃暗殺』、半藤一利『昭和史』（平凡社）などの小説類も授業に深まりを与える重要な本だと思う。

山室信一『キメラー満州国の肖像』（中公新書）

佐野眞一の『甘粕正彦 乱心の荒野』（新潮社）、『阿片王ー満州の霧と夜』（新潮社）、『沖縄誰にも書かれなかった戦後史』（集英社）などは一流のルポルタージュで、私たちのまったく知らない沖縄像を見せてくれる。

最近出た本で『世界史をどう教えるか』（神奈川県高等学校歴史研究会社会科部会歴史分化学会編 山川出版社）は最新の世界史の知見が随所にあふれている。20年経って私達が教えていた世界史がこんなにも変わってしまったのかと驚くと同時に、教師の日頃からの研鑽に身がすくむ思いである。例えば世界史を現場で教えている先生方のどれくらいが次の語句をご存じか？シュメールとスメルの違い、ハカマニッシュ朝ペルシア、ダーラヤワウ1世、アルシャク朝ペルシア、シャープフル1世、フスラブ1世、ビーソトゥーン碑文、「欧米人が自己の文化的な祖先とみなしてきたギリシア文明は、黒人系エジプト文明とセム系フェニキア文明の決定的影響をうけて成立したものである」（マークティン・バナール著『黒いアテナー古典文明のアフロ・アジア的ルーツII』から）などなど…。とにかく教員は多くの本を読み、最新の学問的成果に高いアンテナをあげていなくては学ぼうとしている生徒たちに申し訳がない。

室町時代から江戸時代のイメージを豊かにするためには岩井三四二の小説が面白い。『一所懸命』『月ノ浦惣庄公事置書き』『十楽の夢』『悪党の戦旗ー嘉吉の乱始末』『戦国連歌師』『大明国に参ります』『銀閣建立』『一手千両 なにわ堂島米合戦』などなど。随所に授業内容を豊かにする描写が出てくる。ここに揚げた多くの本は文春文庫に入っているので容易に手にすることができる。

沖方丁^{うぶかたぢ}『天地明察』（角川書店）は江戸時代の暦学者渋川春海（安井算哲）の物語。限りなく知的好奇心をくすぐる小説。

最近、教材に格好の本が出版された（これは「教材に格好」という言葉では片づけられない「重いテーマ」があるのだが）。梅田正己著の『近代日本の戦争ー台湾出兵から太平洋戦争まで』（高文研）である。2008年10月末に問題となったあの田母神俊雄・元空幕僚長が書いた論文を思い出したろうか。マンションやホテル経営を全国展開している企業「アパグループ」が募集した「真の近現代史観」をテーマとする懸賞論文で田母神^{たむかみ}氏が最優秀賞（賞金3百万円）を獲得。論文のタイトルは「日本は侵略国家であったのか」。彼はこの論文で次のような主張をしたのだった。

- ①日本は19世紀の後半以降、朝鮮半島や中国大陸に軍を進めることになるが相手国の了承を得ないで一方的に軍を進めたことはない。
- ②わが国は蒋介石により日中戦争に引きずり込まれた被害者なのである。
- ③わが国は満州も朝鮮半島も台湾も日本本土と同じように開発しようとした。…わが国は他国と

の比較で言えば極めて穏健な植民地統治をしたのである。

④日本はルーズベルトの仕掛けた罠にはまり真珠湾攻撃を決行することになった。

⑤大東亜戦争の後、多くのアジア、アフリカ諸国が白人国家の支配から解放されることになった。…もし日本があの時大東亜戦争を戦わなければ、現在のような人種平等の世界が来るのがあと百年、二百年遅れていたかもしれない（以上全掲書から）。

さて、いまの教科書で勉強している君たちは以上の問題に反論できるか！

梅田正己氏の著書はこのテーマに真っ向から取り組み、完膚無きまでにこの論理を否定したものである。勉強とは何を目的にするものなのか（歴史を学ぶとはどういうことか）を私たちに非常にわかりやすい言葉で伝えてくれる本かと思う。

⑥どんな時にも「絵」を見る教養を（デートコースに美術館巡りをぜひ）…

西岡文彦『2時間の印象派』、『2時間のゴッホ』、『2時間のモナリザ』、『絵画の読み方』
『図解「名画の見方」』、『図説「名画の歴史」』、『五感で恋する名画鑑賞』、『名画でみる聖書の世界（新約編）』

高階秀爾・小松左京共著の『絵画の読み方』（講談社学術文庫）、『名画を見る眼－正・続』（岩波新書）

若桑みどり『絵画を読む－イコロジー入門』（NHKブックス）、『イメージを読む 美術史入門』（ちくまプリマーブックス 69）

NHK迷宮美術館制作チーム『迷宮美術館 第1～5集』（河出書房新社）

いまではもう古書店でしか手に入らないが、ウェンディ・ベケットの「はじめて出会う西洋名画史 シスター・ウェンディの名画物語」は勉強になる名著。

世界史・日本史の文化の部分を教えていて、非常に大切なのが「絵画を見る」ということです。「絵画」は昔、「見る」ものではなく「読む」ものでした。そしてそれは聖書の中に出てくる物語を知らなければ、あるいは日本でも仏教の中の教義を教える道具だったのです。だから絵画は「優しい表現」とか「繊細な美を表現している」とか「力強さが伝わってくる」などという、個人的な感覚で鑑賞させるものではないのです！なぜユリの花がここに描かれているのか、なぜここに時計が描かれているのか、なぜマリアが身に纏っているマントは赤や緑に塗られているのか、画面に蝶が描かれるのは何を象徴しているのか、などという疑問に答えられなければならないのです。さらに、印象派が登場してくる背景は何か、などなど。

上記の本は私達の知らない「本当の絵画」鑑賞の世界に連れていってくれます。ぜひ、ぜひ！

⑦教師になる人たちに…

石川達三の『人間の壁』、壺井栄の『二十四の瞳』

齋藤孝『子どもに伝えたい〈三つの力〉』（NHKブックス 928）、『天才の読み方－究極の元氣術』（大和書房）、『読むチカラ』『勉強のチカラ！』『相手を伸ばす！教養力』（以上いずれも宝島社）、『教育力』（岩波新書）

和田秀樹『能力を高める受験勉強の技術』（講談社現代新書）…いま生徒たちに「なんのために学ぶのか（学校に行くのか）」を教える非常に大切な時期だと思っている。齋藤孝の『勉強のチカラ！』と合わせて、この2書はぜひ教える側が読んでおきたいものである。

藤田英典『義務教育を問いなおす』（ちくま新書 543）

喜入克『高校が崩壊する』（草思社）、『誰が学校を殺したか』（PHP）、『叱らない教師 逃げる生徒 この先にニートが待っている』（扶桑社）

諏訪哲二『オレ様化する子供たち』（中公新書ラクレ）、『ただの教師に何ができるか』（洋泉社）、『学校はなぜ壊れたか』（ちくま新書）、『学校に金八先生はいらない』（洋泉社）、『教師と生徒は「敵」である』（洋泉社）、『学力とは何か』（洋泉社）

読売新聞教育取材班著『教師ルネサンス 教師力』（中央公論新社）この本は教師に成り立ての人が読むと非常に参考になるのではないかな。

河上亮一『学校崩壊』（草思社）、高橋哲哉『教育と国家』（講談社新書）

荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』（中公新書）、荻谷剛彦・夏子・大村はま『教えることの復権』（ちくま新書）、『知的複眼思考法』（講談社+α文庫）、『学力と階層』（朝日新聞出版）、『教育と平等 大衆教育社会はいかに生成したか』（中公新書）

柳田邦男『壊れる日本人 ケータイ・ネット依存症への告別』（新潮社）

クリフォード・ストール『コンピュータが子供たちをダメにする』（草思社）

小浜逸郎『なぜ人を殺してはいけないかー新しい倫理学のために』『人はなぜ働かなくてはならないのかー新しい生の哲学のために』（以上は洋泉社新書）『正しい大人化計画ー若者が「難民」化する時代に』『大人への条件』（いずれもちくま新書）

ところで2011年からいよいよ小学校の5、6年生に週1回の「英語の授業」が必修化する。英文科に学ぶ学生諸君はこのことに無関心ではいられない。その手引き書としてまずは

鳥飼玖美子の『危うし！小学校英語』（文春新書）、鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』（岩波新書）を読んでおきたい。もう一冊、大津由紀雄『英語学習7つの誤解』（NHK出版 生活人新書）も英語を教える場合にぜひ頭に入れておかねばならない本だろう。

岩波新書の最新刊で白井恭弘『外国語学習の科学』なども非常に参考になる。英文科に学ぶ諸君には教育実習に行く前に是非読んでおいて貰いたい本だ。

山住正己『日本教育小史』（岩波新書）、辛淑玉『怒りの方法』（岩波新書）

小倉昌男『福祉を変える経営 障害者の月給1万円からの脱出』（日経BP）…特に第1章は、小・中学校の教員免許を取得する時に「介護等体験」に行く諸君には事前に必読！

本田由紀・内藤朝雄・後藤和智『「ニート」って言うな！』（光文社新書 237）

これも先にあげた著者だが、香山リカの最新刊『14歳の心理学』も重要（コミ心の人で教職課程をとっている人は特に）。

雨宮処凜『生きさせろ！ 難民化する若者たち』（太田出版）『プレカリアートの憂鬱』（講談社）もフリーターやニートたちの強烈なドキュメントをぜひ読んでもらいたい一冊。

同じ著者の最新刊である『排除の空気に唾を吐け』（講談社現代新書）についても同様。

同様に、湯浅誠『反貧困ー「すべり台社会」からの脱出』（岩波新書）や赤木智弘『若者を見殺しにする国 私を戦争に向かわせるものは何か』（双風社）も本当に勉強になる。

島田洋七『佐賀のがばいばあちゃん』（徳間文庫）もなかなか味のある教育論。

小野田正利『イチヤモン研究会 学校と保護者のいい関係づくりへ』（ミネルヴァ書房）、小島宏編集『失敗しない新任教師の「法律力」』（教育開発研究所）等は新任教師の手軽な案内書となろう。

野口健『確かに生きる 落ちこぼれたら這い上がればよい』（集英社文庫）は生徒に進路についてアドバイスする時には非常にいい本となろう。

⑧国語の先生になる人のために、ぜひ言っておきたいことのいくつか。

- ・本を読むことの楽しさ、大切さを教えてほしい。
- ・音読の大切さを認識してほしい。そして美しい文章は「暗唱」させること。
- ・ただ「ひとり」、静かに本と向き合っ、その著者（それが「偉人」の場合もあるだろう）が語る人生を聞くという、そんな緊張の時を経験させてやってほしい。
- ・古典文法と日本文学史、それに漢文入門をマスターしておくこと。

そのためにはこんな本を。

先にも書いたが、齋藤孝の『読書力』（岩波新書）をとりあえず読んでおくこと。

ついで高島俊男『漢字と日本人』（文春新書）、橋本進吉『古代国語の音韻に就いて』（岩波文庫）、松本修『全国アホバカ分布考ーはるかなる言葉の旅路』（新潮文庫）、大野晋『日本語はいかにして成立したか』（中公文庫）、井上ひさし『国語元年』（これは面白いよ）、佐野眞一『遠い「山びこ」ー無着成恭と教え子たちの四十年』（文春文庫）など。

とくに佐野の著書は国語の先生というだけでなく、教師になる人にとっては必読の書。

清水義範『作文教室』『日本語必笑講座』『はじめてわかる国語』『目からウロコの教育を考えるヒント』（いずれも講談社文庫）には授業中の余談として使える話が満載されている。

小松英雄『丁寧を読む古典』（笠間書院）もすごい本。古典を読むためにはどんな勉強をしなければならぬか、あるいは学者とはどれほど勉強しなければならないかを教えてくれる本。

さらに古典文法にも通暁していなければならないのは当然である。いまでは古書店をかなり熱心に探さなければならないだろうが、大野晋『日本語の文法（古典編）』（角川書店）は最高の入門書である。少なくとも高校現場の国語の先生の多くがこの本を読んでいてくれたら、これだけの文法嫌いを生まなくてすんでいるのに、と思う。ただしこの本は古書店で探す以外にないので、それにかわって手に入れやすいものは同じ著者が書いた『古典文法質問箱』（角川ソフィア文庫）を読むこと。

国語の科目にある「現代文」は非常に勉強し難い科目として生徒は困っている。しかしこれこそ大学に入ったら、もっとも重要な科目である。この科目の目的と学び方を教えることは、国語の先生にとって非常に大切なこととなる。そのためにはぜひこの本を勧める。受験参考書と馬鹿にしてはならない。

出口汪ひし『早わかり文学史』（語学春秋社）『出口汪のメキメキ力がつく現代文 ライブ1～6』（小学館）、『高Iからの出口の現代文講義の実況中継』（語学春秋社）。

石原千秋『学生と読む「三四郎」』（新潮選書）もぜひ。大学での勉強の参考となることが満載されている。国文科の学生、必読！

※『学び舎』（創刊号）でも少し書いたが、受験参考書についても今一度触れておく。

受験参考書に関しての本格的「書評」を、これまでに見たことがない。しかし、大学入試のための勉強をしている受験生は50万以上。多くの若者たちが読んでいる本は「少年マガジン」などの週刊マンガ誌を別にすれば、受験参考書だと思う。これら受験参考書についてなぜ語られないのか、不思議でしようがない。わが国の若者文化を語る時、受験参考書を除いては意味がないのではなかろうか。

もし私が受験生だった頃に、以下の参考書に出会うことができたなら、もっと勉強が楽しかっただろうに、と悔しい思いがする。これら「『学参』の名著」については『学び舎』（創刊号）に書いておいたので、それを見られたい。

⑨勉強に疲れた時には、写真集や詩集・歌集に目をやるのもいいでしょう。

この分野の「名著」についても『学び舎』創刊号に書いておいた。

○最後に…

2009年7月の朝日新聞日曜版に毎回掲載される図書紹介欄で、仲田千穂さんが書いた『「特攻花」って知ってる？』（しのめ出版）という本を知りました。その第1章には次のような文がありました。

「私は19才になるまで、太平洋戦争についてはあまり学校で習った記憶はありません。小学生のときは広島、長崎の原爆の話や、クラスで千羽鶴を折り被災地に送った事などはなんとなく覚えていたり、日の丸の旗を振って、戦いに行く人達のを皆が見送っている古い写真も教科書で見た様に思います。中学では縄文時代や、平安、室町時代のこと等を習った覚えはありますが…何故か太平洋戦争の事は印象が薄い感じがしました。高校時代は勉強よりもやっぱり遊ぶ事の楽しさや、バイトや友だちの事で、昔の事を知りたいとかは、あまり思いませんでした。

短大に行ったのも4年間も学生として学んだり、遊んだりするには長過ぎるし…はっきりとこれをして、というのも見つけきれずに、何となくファッションや、デザイン、写真などの授業が組み込まれている京都の短期大学に入りました。ここで何か見つけられるかなと漠然とした気持ちで現実の社会や、ましてや歴史とは無縁の学生生活を楽しんでいました。

今思えばそんなのきな私の前に、突然大きな転機が19才の夏に訪れました。

「特攻花って知ってる？」写真の授業中、先生の質問からそれは始まりました。…中略…

56年前の太平洋戦争中、沖縄を包囲するアメリカ艦隊に、体当たり特攻出撃する19才前後の若い

隊員たちに、娘たちはそっと野の花を贈っていました。

彼らはその花を握りしめて沖縄に向かって行きました。

途中、九州と沖縄の間にある中継基地喜界島の上空から「花も一緒に散って行くのは忍びない…」との思いからか、その花を落とし勇躍、沖縄に向かって行きました。

又、島から飛び立つ特攻隊員たちも贈られた花を、何かを願う様にそっと滑走路の隅に置き、静かに沖縄に向けて飛び立って行きました…。

その花の種が風に舞い…56年たった今も島の滑走路周辺に、毎年花を咲かすこの小さな天人菊の花を、島の人たちは「特攻花」と呼び、平和を願う花として大切に見守っています。

7月、夏休み前の教室は一瞬シーンとなりました。何故か私は胸の鼓動が高鳴り、熱いなにかがこみ上げてくるのを感じ、そしてその特攻花の話が目の前に映像として見える様な感覚がしました。その花が今も咲いているなんて何てドラマチックで、何て悲しい物語りなの…特攻花…そんな花の話は初めて聞きました。56年間もその季節になると毎年咲き続けているなんて…それも一部にだけ群生しているのは絶対に特攻花が、何かを発信し続けている証拠に違いない…。

『誰かこの花を撮りに行きたい奴は、おらんか?』即、私は手を挙げました。いつもは周りの友達の顔を見て誰かと一緒にないと何もしない、それが当たり前の私でした。でもこの話は誰かと一緒になくて一人でも行って見たい、と私を変えてくれました。…その日が私の「特攻花」の始まりでした」

こうして彼女の「特攻花」撮影の旅が始まりました。それは彼女の「平和への学びの旅」でもありました。こうして彼女は何回も喜界島への撮影旅行や各地の写真展開催、そして元特攻隊員の人たちやそのご遺族の方たちとの交流が始まったのです。この本はその記録集です。

それは何にも関心を持たずに短大へ進んだ一人の若者の立派な成長の証でもあります。

きっと今の君たちに大きな影響を与えてくれる本となるでしょう。

なお、上記の本と同時にぜひ『学び舎』の創刊号に書いておいた『きけ わだつみのこえ』についての部分を読んでいただけたらと思う。

もちろんこれだけでは足りない。最後の最後に学生諸君に伝えたいこと。

瑞々しい感性が溢れる若いうちにアジアへの旅をすることです。

そして、そこで「迫力ある貧しさ」を学んでもらいたい!